

論文

# 第二言語としての日本語にみるイントネーションの習得－スウェーデン人学習者のデータから－

永野マドセン泰子

## 要旨：

スウェーデン人母語話者による第二言語としての日本語のイントネーション習得過程を、口頭プレゼンテーション用のデータをもとに考察した。学習者のレベルは中級後期から上級にかけてである。分析基準としては生成音韻論に基づく東京方言イントネーションモデルから派生したJ\_ToBIのラベリング項目を用いた。その結果、スウェーデン人学習者による日本語のイントネーションは、1) 比較的大きな統語構造に対応して「へ」の字型のピッチ形状が出現する、2) その冒頭に2種類のピッチアクセントが出現する。3) (1) のダウンステップにより、より大きな統語単位を構成するイントネーションが出現する、という3段階を経て習得されることが示唆された。日本語ではすべての内容語に「平板型」か「下降型」のピッチアクセントが付与され、それが韻律の基本単位であるアクセント句を構成する。しかし、学習者はそれより遥かに大きな統語単位をもって独自のアクセント句を構成し、スウェーデン人学習者に共通する中間言語文法を作りあげている。2種類のピッチアクセント自体は早い段階から習得されるが、アクセント句という小さな単位の習得はスウェーデン人学習者にとって極めて難しい。また、情報構造を反映するトピックやフォーカスのイントネーションも、今回の調査の対象となった学習者では全く出現せず、習得の難しい項目である事が推測される。

**キーワード：**第二言語としての日本語、スウェーデン語母語話者、習得、

## イントネーション、ピッチアクセント、統語構造、情報構造、ダウンステップ

### Abstract :

Prosodic acquisition of L2 Japanese by Swedish learners was analyzed by using the model of intonation proposed for Tokyo Japanese and its consequent J\_ToBI labelling. Characteristic acquisition patterns produced by the Swedish learners are: 1) The lowest level prosodic unit termed accentual phrase appears, it corresponds to a larger syntactic unit such as phrase and clause, 2) pitch accent distinction appears at the onset of this prosodic unit, 3) the prosodic units form a larger unit by downstep. In Japanese, all the content words have one of the two pitch accents, accented or unaccented. Thus each word together with the following grammatical elements forms the lowest prosodic unit called accentual phrase. It was difficult for the Swedish learners to capture this small accentual phrase in Japanese. Instead, learners created their interlanguage by creating their own accentual phrase which is much bigger in size compared to the Japanese accentual phrase. The pitch accent distinction was acquired relatively early but the acquisition of the right size accentual phrase appeared to be very difficult for Swedish learners. Intonation based on information structure did not appear in the present data, which implies topic and focus intonation in Japanese are difficult to acquire.

**Keywords :** intonation, pitch accent, acquisition, Swedish learners of L2Japanese, syntactic structure, information structure, downstep

### 1. はじめに

第二言語としての日本語の習得研究は、80年代から90年代にかけて日本語が第二言語として世界で躍進したのを契機に現在まで多くのすぐれた

研究成果を生み出している。しかしアクセントやイントネーションなど、韻律（プロソディ）とよばれる分野での習得研究となると数はまだ極めて限られている。日本語では伝統的にイントネーションを文末のモダリティとして扱うのが一般的で、第二言語としてのイントネーションの習得でも、平叙文・疑問文のような範疇として分析することが伝統的であるが、本稿では日本語のイントネーションを文末に限らず発話全体の基本周波数と定義し分析する。理論的には生成音韻論に基づく東京方言のイントネーションモデル（Beckman & Pierrehumbert 1986）に従い、分析基準としてはこの理論から派生したJ\_ToBIのラベリング項目（Venditti 2005）を用いた。本稿の目的は、スウェーデン人学習者による第二言語としての日本語のイントネーション習得過程を考察し、学習者による日本語のイントネーション習得モデルの第一歩を築くことである。また本稿と同じ資料を用いて行った複文の使用の広がりや発音の習得研究（永野マドセン・岡本グスタフソン・清水 印刷中）と合わせて、他技能・分野とも関連した習得研究を目指すものである。日本語学習者の近年の進路の傾向として、日本で大学院進学と就職の希望が着実に増えつつあるが、その際にまず求められるのは高度な音声コミュニケーション能力である。その点からも、イントネーションを含めた音声と文法を同時に扱う総合的なコミュニケーション能力の分析とその評価基準を検討することは重要であると思われる。

## 2. 日本語のイントネーション

ここでは日本語のイントネーションを構成する上で重要な役目を担ういくつかの要素の概観を述べたい。まず日本語における最も基本的な構成要素であるピッチアクセントとそこから派生するアクセント句、続いて修飾構造などを含む統語構造の影響、そして最後に談話の構造という観点からトピックやフォーカスがイントネーションに与える影響の順に取り上げてみたい。なお、文末のモダリティや、感情・ニュアンスもイントネーションの重要な要因で、時にはアクセント自体を変えてしまうこともあるが

(定延 2013)、本稿の対象となったのは中級から上級にかけてのレベルのスウェーデン人学習者であり、発現例がなかったためここでは取り上げなかった。

## 2.1 ピッチアクセントとアクセント句

ピッチアクセントという語は現在のイントネーション分析では、ほとんどすべての言語で使用されているが、言語によってそれが「辞書的」であるかないかの区別がある。日本語のピッチアクセントは「辞書的」、つまり語彙によって決まっておらず辞書に記載されているが、英語のような言語におけるピッチアクセントは post-lexical と呼ばれ、その性質が異なる。日本語には2種類のピッチアクセントがあり、伝統的には「下げ核」を持つ「下降型」とそうでない「平板型」に分類されている。なお、「下降型」はさらに、語のどこに「下げ核」が来るかによって「頭高型」「中高型」「尾高型」などと分類することができる。図1は東京方言話者による平板型「乗る」と下降型「飲む」の音声波形とピッチである。



音源 1

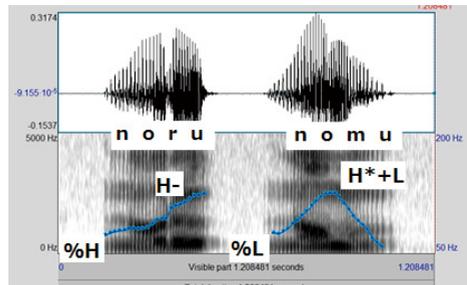


図1：東京方言話者（男性アナウンサー）による「乗る」（平板型）と「飲む」（下降型）の音声波形とピッチ（『日本語音声<sup>1)</sup>』CDより）

イントネーション構造の基本となるのは、日本語の場合この「下降型」と「平板型」という二つのアクセントを基にしたアクセント句という単位にみるピッチ形状である。イントネーション分析におけるアクセント句は単独発話の場合、文法単位である「文節」に対応し、内容語とそれに続く

助詞などからなる単位に対応する事が多い。しかし、イントネーションは上記のような二種類のアクセント句を単に連ねたものではなく、その時々  
の文脈によってピッチが強調されたり、反対に抑えられたりしながら、より  
大きなイントネーション単位であるイントネーション句 (IP) へとまと  
まっていく。

本稿で用いられたイントネーションの分析は、理論的には生成音韻論  
による東京方言のイントネーションモデル (Beckman & Pierrehumbert  
1986) を踏襲し、実際のラベリングにはこのモデルを発展させた J\_ToBI  
(Venditti 2005) の項目を簡潔にしたものを用いた。生成音韻論によるイン  
トネーションモデルの枠組みでは、日本語の「下降型」と「平板型」はそ  
れぞれ accented ( $H^*+L$ )、unaccented ( $H-$ ) と呼ばれるが、本稿では日本  
人に馴染みの深い「下降型」「平板型」を引き続き用いる。J\_ToBI にみる  
日本語イントネーションモデルの基本となるのもこの二つのアクセントか  
らなるアクセント句 (AP) という韻律単位であり、通常は句頭にピッチ  
の上昇があるため、それをもってアクセント句の境界と判断できる。

スウェーデン語には2種類のピッチアクセントがあるが、その出現はス  
トレスの有無により制御されている。つまり、英語と同系列の言語である  
スウェーデン語はまず何よりもストレス言語であり、それに加えて語彙的  
なピッチアクセントもあるという、かなり複雑な韻律体系を持っている。  
しかし日本語同様、2種類のピッチアクセントを区別し、方言間でアクセ  
ントのバリエーションが多く、なかには無アクセント方言もあるなど共通  
点がいくつかある (Nagano-Madsen & Bruce 1998)。スウェーデン語に二  
つのピッチアクセントの対立があることから、スウェーデン人学習者が、  
ピッチアクセントをもたない英語などの欧米語話者よりも、日本語のアク  
セントに対して感受性が強いという仮定は十分なりたつ。

## 2.2 統語構造とイントネーション

下位韻律単位であるアクセント句が二つ以上集まって上位の韻律単位を  
構成するとき、2番目以下の語のアクセントは順次低いピッチ領域で実現  
する。これは「準アクセント、カタセシス、ダウンステップ」などと呼ば

れてきた現象であるが(以下「ダウンステップ」と呼ぶ)、下降型アクセントの語にみる現象である。平板型アクセントの語が続く時はそれらが融合してひとつの大きな平板型の句や節として実現される。後続アクセントのピッチ値が下げられるときの統語構造による生起条件の典型的なものとして郡(1997)は(1)形容詞と名詞による形容詞句あるいは名詞が先行の助詞「の」によって形容詞句を形成する場合、(2)動詞が先行の副詞あるいはそれに準ずる語によって修飾される場合、(3)並行表現である場合の3つをあげている。加えて「フォーカスのある語に続く場合」という語用論的な条件もあげているが、ここに挙げられた3項目に限らず、ダウンステップはより大きな統語構造である節や文といった統語単位でも見られる。このようにダウンステップでまとめられた上位韻律単位をイントネーション句(IP)という。

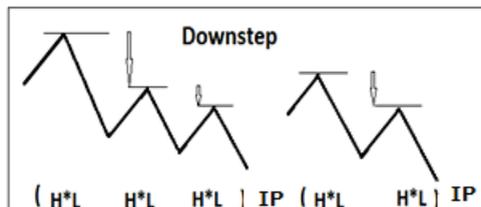


図2：ダウンステップ

しかし統語単位とイントネーション単位の対応では、同じ日本語でも違いがある。永野マドセン(2009)は、高知方言と東京方言について、形容詞句、副詞句、およびそれらが埋め込まれた連体修飾節についてイントネーションとの対応を調べた。その結果、東京方言話者のほとんどが「おかあさんのプレゼントが届いた朝」のような連体修飾節をひとつのイントネーション単位として読むのに対し、高知方言話者ではそれをより小さな単位に区切る傾向がみられた。また東京方言話者はピッチの高低を強調してめりはりをつけるフォーカスイントネーションを使う傾向が強いのに対し、高知方言話者では余り変化をつけない。大阪方言と同系列である高知方言はアクセントの独立性が強いともいえる。このような違いは、杉藤(2001)が

東京方言をイントネーション言語、大阪方言をアクセント言語と呼んで区別したことに通じるであろう。

構文構造や修飾構造を反映するイントネーションについては、「左枝分かかれ、右枝分かかれの構文」の違いとして、東京方言をはじめとする本土方言で広く調査研究されている（例えば前川1997）。「次郎が読むと眠たくなる」と「次郎は飲むと眠たくなる」の違い、「青い屋根の家が見える」と「青い大きな家が見える」の違いなどであるが、「次郎が読むと」では、格助詞「が」でマークされた「次郎」はうめこみ文の述語「読む」の主格になるが、主文の述語「眠たくなる」の主格とならないのに対して、後者では「は」でマークされた「次郎」は直後の述語「飲む」だけではなく、主文の述語「眠たくなる」の主格となる。左枝分かかれのみからなる「青い屋根の家」では形容詞「青い」が「屋根」を修飾し、さらに「青い屋根の」が「家」を修飾しており、「青い屋根の家」はひとつのイントネーション単位で発話される。対して、右枝分かかれを含む「青い大きな家」では「青い」も「大きな」とともに「家」を修飾し、イントネーションでは「青い」と「大きな家が見える」と2つに分かれる。日本語母語話者の発話では、このような統語構造の違いが規則的にイントネーションに反映されていることが多い。

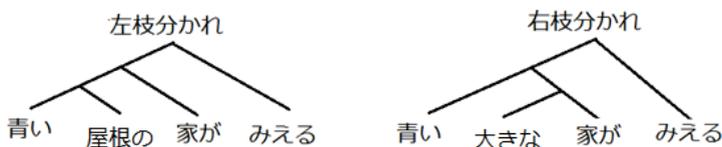


図3：左枝分かかれと右枝分かかれの統語構造

## 2.3 情報構造とイントネーション

日本語はトピック＋コメントを基本構造としてもつ言語であり、トピックマーカーとして最も一般的なのは「は」である。従って日本語学習者の構文にも「－は－です」という構文が多用されている。また、「は」はしばしば格助詞の「が」と対比され、「太郎は行った」と「太郎が行った」

が比較されるが、学習者にとってこれはなかなか難しい。「太郎は行った」という文では、「太郎」はすでに話の中で何度かでていた「旧情報」であり、この文の重要なインフォメーションはコメントの「行った」で、こちらは「新情報」である。従って、イントネーションでは新情報の「行った」にフォーカスが置かれる場合が多く、そうでなくても、コメント部分が極端に抑えられる発話とはならない。対して、「太郎が行った」という文では「が」に先行する「太郎」は *contrastive focus* であり、「花子ではなく太郎が行った」という意味になる。従ってこの文のイントネーションでは「太郎」がフォーカスとなり、後部の「行った」は「太郎」よりも抑えて発話される。また「は」や「が」を含む文でなくても、文脈からフォーカスが置かれる語や句はピッチが高く発話され、反対に後続の語や句のピッチは極端に低く平らに抑えられる発話となる。

### 3. 調査

#### 3.1 被験者

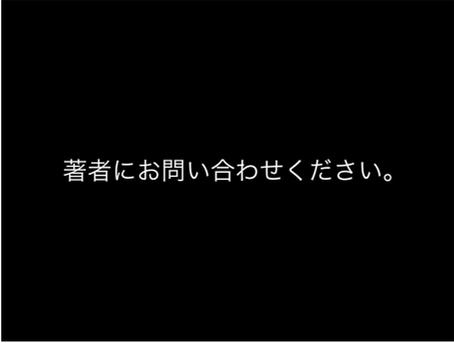
イエーテボリ大学に在籍するスウェーデン人学習者9名を対象に調査した。学習レベルは中級後期から上級にかけてであり、このうち5名が日本留学の経験がある。ビデオ作成時までの日本語学習時間は最も短い学習者で490時間である。学習者の性別と日本留学の有無は下の表1のとおりであるが、学習者BとEは録音状態のためか、学習者の音質のためか、ピッチの抽出があまりきれいにできない。なお、学習者の発話に出現した文と同じものを一部、東京方言話者（女性・30代・日本語教師）による録音で再現し、両者のイントネーションを比較した。

表 1：学習者の内訳と日本への留学の有無

学習者	A	B	C	D	E	F	G	H	I
性別	男	男	男	女	女	女	女	男	女
日本留学の有無	なし	なし	なし	なし	半年強	半年強	半年弱	一年	一年

### 3.2 資料

資料は「会話」の授業の仕上げとしてビデオ録音されたものである。この「会話」の授業では、日本人留学生のための「マニュアル」を作成し、発表、録音、発表内容関連の画像と組み合わせ、ビデオとした。マニュアルは、交通機関、料理、気候、観光、音楽、スポーツなど9つのテーマで構成されており、それぞれを9名の学生が担当した。9名を合計した総録音時間は22分であった。学習者はまずプレゼンテーション用の原稿を書き、これには一部教師の手が入っているが、原文の特徴は留めており、日本語として不自然な表現や一部助詞の間違いも混じっている。プレゼンテーション用の資料を使うことは、コントロールされたテスト法による調査でないことから、出現しなかった文型が習得されていないものなのか、偶然によるものか、あるいは話者が苦手な文型として回避したものか、テーマによるものなのか、などの判断ができないという短所があげられる。また厳密な仮定を実験検証することもできない。反面長所としては、プレゼンテーションは自国でも日本留学中でもよく使われるタスクであり、資料として集めやすいということがある。また通常、発表用の原稿を書くのでテープ起こしをする手間が省ける上、作文とスピーチという両技能の資料が得られる。



著者にお問い合わせください。

### 3.3 分析基準と手順

文末イントネーションなど一部の研究を除くと、イントネーション習得に関する研究は極めて少なく、共通の分析基準なども提唱されていない。本稿では試みとしてJ\_ToBI (Venditti 2005) にみるラベリングの要素を簡単にしたものを使用した。主な構成要素は、アクセント句に先行するピッチの始点(%L)、およびピッチの上昇 (H-)、下降型アクセント (H\*+L)、そしてアクセント句のピッチの終点(L%)である。Venditti(2005)によるJ\_ToBIは、生成音韻論に基づく東京方言のイントネーションモデル (Beckman & Pierrehumbert 1988) の理論にその後の研究成果を反映させたものである。主な違いは、Beckman & Pierrehumbert で三つあった韻律単位 *accentual phrase* (AT)、*intermediate phrase* (iT)、*utterance*(utt)のうち (iT) と (utt) をまとめて *intonation phrase*(IT) とし、二つの韻律単位に減らしたことである。なお本稿では *accentual phrase* をアクセント句 (AP)、*intonation phrase* をイントネーション句 (IP) という日本語にしてある。手順はビデオから直接音声を録音したものを音声分析ソフト PRAAT (version 5.3.64) で画面の基本周波数 (ピッチ) と、耳からの音声の両者を確認しながら、イントネーションを分析した。学習者の習得状況をよく反映する発話のイントネーションをスクリーンショットにより保存した。その後、画面のピッチ形状に上記のJ\_ToBIのラベリングを付与した。図中の縦線はアクセント句の境界である。

## 4. イントネーションの習得過程

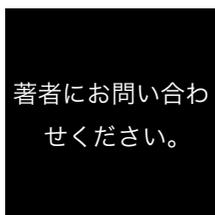
本稿では9名の学習者にみるイントネーションの習得状況を分析した。9名は中級後期から上級にかけてのレベルであるが、日本留学経験の有無や、個人差があるため、イントネーションの習得状況はかなり幅がひろい。第二外国語の習得では学習者はそれぞれ中間言語文法を持っているとされ、学習者の癖や好みがその中に出現する。しかし、複数のスウェーデン人学習者に共通すると思われるピッチ形状もあり、聞いた印象でも、長く教えてきた教師が「スウェーデン人学習者の典型例」と感じる発話がある。ここではそれらを中心にスウェーデン学習者のイントネーションの習得過程を追ってみたい。

### 4.1 リセット期

図4と5にそれぞれイントネーションの習得が始まっていない学習者の発話例と、同じ文を東京方言話者が読んだ発話例を示す。図4の発話では、ピッチは平坦で抑揚が全くない。このような例は日本語学習者に限らず、スウェーデン語母語話者によるアラビア語のイントネーションなどでも観察されている。すべての学習者というわけではないが、一部の学習者ではテキストの内容に注意が向かい、韻律にまで注意が向かわないのではないかと教師間では解釈されている。イエーテボリ大学の日本語教師はほとんど日本語母語話者ではあるが、ピッチアクセントやイントネーションについては特別に教えたり練習したりしていない。この点、中国語のようにトーンが意味識別にかかわるため、最初からトーンについて教える言語とは状況が異なると考えられる。第二言語の習得では、しばしば母語からの転移が起こり、それは特に発音の分野で顕著とされている。スウェーデン人母語話者による日本語発話の場合にも、特に子音では母語の影響による負の転移が初級や中級の学習者では観察され、それは母語と目標言語の音韻体系の対照研究からほぼ予測することができる。しかし、イントネーションの習得においては学習者Aのように、母語のイントネーションを完全にリセットしてゼロからスタートする場合も折々見受けられ、母語の影響は

やや遅れて出現するケースも多い。

第2.1節で述べたように、スウェーデン語は同ゲルマン語系列の英語同様、ストレスを有する言葉であるが、加えて2種類のピッチアクセントの対立があり、韻律体系としてはかなり複雑である。またその発話はピッチの上下が頻繁にあり、かなりメロディアスであることから、図4にみるような発話は母語の影響を完全にリセットした状態といえよう。対して図5にみる東京方言の母語話者では、たくさんのアクセント句（縦線はその境界）が観察され、それらがダウンステップをもってより大きな単位であるイントネーション句（図中の赤線およびIP）にまとまっている。ちなみにToBIでは純粋にピッチに基づいてイントネーション境界を決めるので、統語構造に基づく境界と同じではないことに注意されたい。以下では、これらイントネーションの構成要素が、どのような順序で習得されるのか考察してみたい。なお以下の図では、一部の例外を除いてピッチ領域を男性話者は200Hz、女性話者は400Hzに統一してあるが、ピッチ領域の差は今回のイントネーション分析には全く影響を与えない。なおPRAATの図ではピッチ領域は右軸に示されている。



音源 2

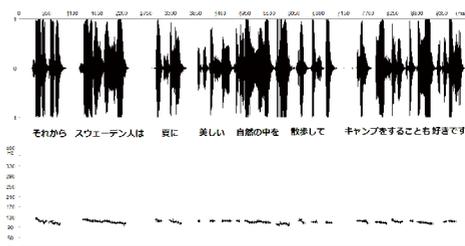
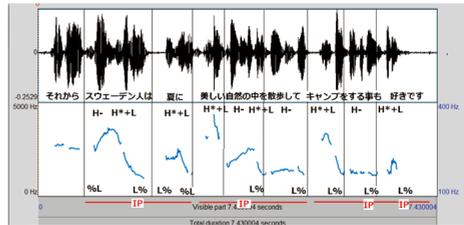


図4：学習者による発話例（学習者A）



音源 3

図 5：図 4 と同じ文を母語話者が発話した  
場合のイントネーション

## 4.2 統語的まとまりの出現

ピッチの抑揚が全くない、あるいは大変少ない先の図 4 のような状態から、イントネーション習得への第一歩としてよく観察されるのが図 6 のような発話である。この文は日本語の基本構造であるトピック・コメント構造を持っており、助詞「は」に先行する「スウェーデン人の性格」というトピックと「ときどき日本人の性格に似ていて」というコメント部分からなる。この二つの構成要素に対し、それぞれが「へ」の字型のピッチ形状を持つイントネーション単位をもって発話されている。学習者 C では、このピッチ形状が基本イントネーション単位となっており、この冒頭にピッチアクセントがみられることから、「アクセント句」と呼ぶ。東京方言母語話者の場合は、「アクセント句」は文法単位である文節に対応する事が多いが、スウェーデン人学習者の場合は文節より大きな統語単位である句や節に対応することが多く、むしろ上層韻律単位である「イントネーション句」(IP) がカバーする範囲に近い。ちなみに冒頭にピッチの上昇があり、その語ゆるやかに下降する「へ」の字型のピッチ形状は、藤崎モデル(藤崎・須藤 1971)にみる東京方言のフレーズ成分に似ている。また、この「へ」の字型のピッチ形状は、日本語のなかでも宮古伊良部島にみるような無アクセント方言のイントネーションに酷似するが、違いは伊良部島方言ではこの「へ」の字型のピッチ形状がほぼ文節単位でみられ(永野マドセン 2013)、ここで観察されるような「ときどき日本人の性格に似ていて」のような長い単位には対応しないことである。

また注目すべきは、この「へ」の字型のピッチ形状の冒頭に、ピッチアクセントが出現していることである。「スウェーデン人」と「ときどき」は前者が下降型アクセント（H\*+L）、後者が平板型アクセントであるが、学習者は前者を平板型アクセント（H-）のように発話している。この段階で冒頭には平板型と下降型のアクセントが観察され、学習者が二種類のピッチアクセントを認識している可能性を示唆している。ちなみに学習者のピッチアクセントが初めて出現する時は、このようにイントネーション単位の冒頭であり、中間や末尾に最初に現れることはまずない。またこの学習者では文末音調のH%が「似ていて」に表れ「て」のピッチが高く発話されているが、文末音調のバリエーションは通常は日本留学・滞在経験のある学習者のイントネーションの特徴である。この学習者は留学はしたことがないものの、何度か日本を旅行で訪れている。ちなみに、上記の無アクセント方言でも、文末音調、つまり最後の拍を高くする発話はよく聞かれる。

比較のため、同文を東京方言母語話者が発話したものを図7に示す。ここでは5つのアクセント句（縦線で境界を示す）が観察される。イントネーション句はその内部にアクセント句をいくつか含む単位であり、またダウンステップの範囲でもあり、イントネーション句の境界ではピッチのリセットが行われる。この文では「スウェーデン人の性格は」と「日本人の性格に似ていて」は二つのアクセント句からなるイントネーション句（IP）を構成している。またそれぞれの2番目のアクセント句はピッチが劇的に低められ、前部にフォーカスを置いた発話となっている。つまり「日本人」と「スウェーデン人」にフォーカスが置かれ対比されている。スウェーデン人学習者と東京方言母語話者を比較すると、後者ではアクセントの後ピッチがベースラインまで一気に下がりその後平らに続くのに対し、学習者の発話ではピッチの下降がゆるやかに続いている。



音源 4

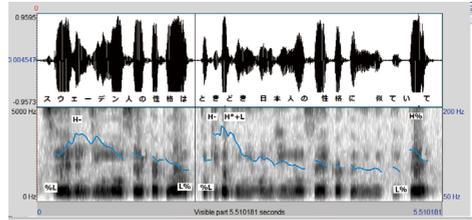


図 6：学習者による発話例 (学習者 C)



音源 5

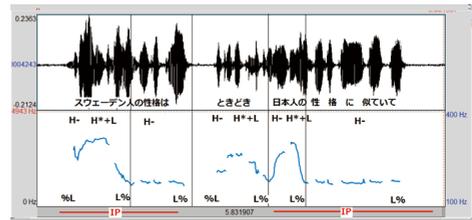


図 7：図 6 と同じ文を母語話者が発話した場合のイントネーション

図 8 は同じく学習者 C による発話例である。ここでも「そのように季節によって変わります」という長い文が冒頭にピッチの山を持つ「へ」の字型のイントネーション単位で発話されているが、それに先立つ「それで」「ひとも」という語はそれぞれ平板型のアクセント句として発話されており、少しずつアクセント句が認識されて来ている。学習者の発話を東京方言母語話者のそれと比較すると、イントネーション構造が大きく異なることがわかるが、これは文脈による情報構造が反映されているためである。母語話者による図 9 ではイントネーションのピークは「季節によって」であり、それに続く「変わります」は低く抑えられ、フォーカスイントネーションとなっている。また、文頭の「それで、ひとも」も低い。対して学習者の発話は通常、冒頭にピッチの山が来て、次第に低くなるというパターンが典型的であり、文脈を反映した図 9 のようなイントネーションが出現するのはかなり上級になってからである。



音源 6

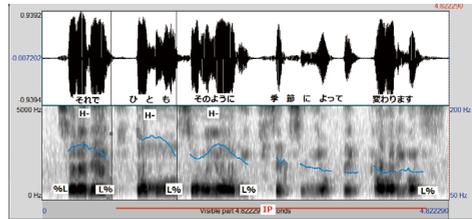


図 8：学習者のフォーカス部のイントネーション (学習者 C)



音源 7

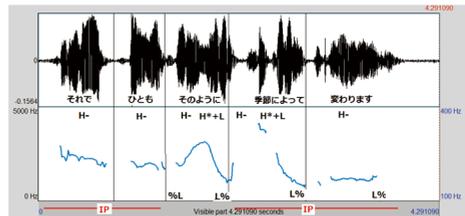


図 9：図 8 と同じ文を母語話者が発話した場合のイントネーション

### 4.3 ピッチアクセントの習得

日本語のイントネーションの基本成分である二種類のピッチアクセントは、スウェーデン人学習者によってどのような過程を経て習得されるのであろうか。また母語背景であるスウェーデン語のピッチアクセントはどのような形で「負の転移」となって出現するのであろうか。

発話を統語構造に基づいて大きな単位に区分し、その冒頭に 2 種類のアクセントを区別して置く、という過程は多くの学習者に共通してみられるが、そのピッチアクセントの詳細をみてみよう。日本語の平板型アクセントではだいたい語頭から二拍目でピッチの最高値に達し、長い語ではその後デクリネーションと呼ばれるゆるやかなピッチの下降が観察される。また下降型でも頭高以外では 2 拍目でピッチが最高値に達し、その後アクセントの置かれる拍まではおよそ同じ高さのピッチが続き、そしてピッチが一気に下げられるというピッチ形状を示す。スウェーデン人学習者の発話するピッチアクセントでは、しばしば平板型なのか下降型なのか、判断

に迷うことがある。ひとつには、下降型アクセントの特徴である「急激なピッチの下降」が比較的ゆるやかに発話されること、今ひとつにはピッチが母語話者のように二拍目で最高値に達せず、かなり遅れて最高値に達するケースが多いためである。

まずピッチの下降についてであるが、日本に留学経験のない学習者 C (図 10) の「丁寧な表現は」や「あまり必要では」の「は」にみられる下降型アクセントではピッチの下降がゆるやかで、平板型との区別が難しい。しかし上級の学習者では、下降型アクセントのピッチの下降がシャープになり、その後に続くピッチとはっきり区別できるようになる。図 11 (学習者 I) にみる発話では、「バイキング」と「各自で取って」の下降型アクセントとそれに続く低く平らなピッチは東京方言イントネーションの特徴をよく示している。ちなみにこの学習者は東京に一年間留学経験がある。



音源 8

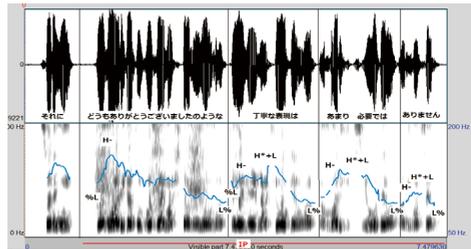
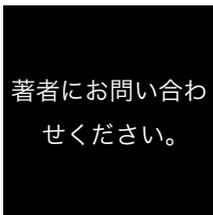


図 10：学習者によるダウンステップの例 (学習者 C)



音源 9

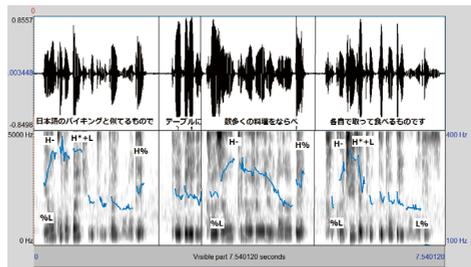


図 11：学習者による 2 種類のピッチアクセントおよびフォーカスイントネーションの例 (学習者 I)

次に日本留学経験のない学習者 D の発話をみてみよう（図 12）。ここでは下降型の語が五つ連続するが、学習者の発話では一部の語はここでも平板型との区別がつきにくい。また「アーモンド」は「ア」にアクセントが置かれる頭高型アクセントであるが、学習者の発話では「モ」までピッチが尻上がりに上がっている。東京方言話者による同じ発話（図 13）と比較すると、学習者ではピッチの下降のタイミングがすべての語で遅れているのが観察される。これはピッチアクセント習得の初期では多くのスウェーデン人学習者に規則的にみられる現象である。しかし半年の留学経験のある学習者 G の発話（図 14）と東京方言話者の発話（図 15）を比較すると、連続する四つの下降型アクセントのピッチ形状は両者でほぼ同じで、下降型アクセントが学習者によって正確に習得されていることが観察される。



音源 10

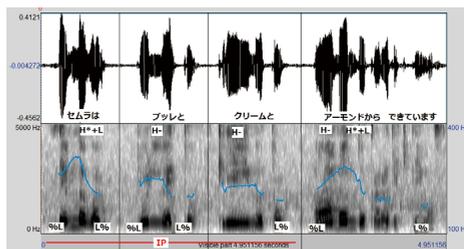


図 12：学習者音声においてピッチの上昇タイミングが遅れている例（学習者 D）



音源 11

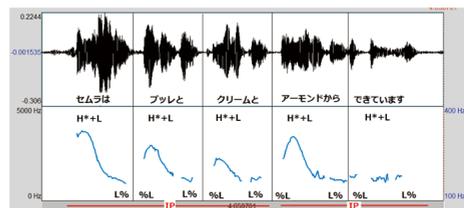


図 13：図 12 と同じ文を母語話者が発話した場合のイントネーション



音源 12

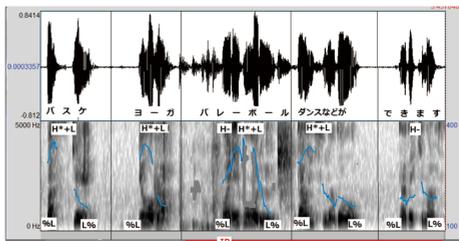


図 14：学習者音声において下降型アクセントでピッチの下降が見られる例 (学習者 G)



音源 13

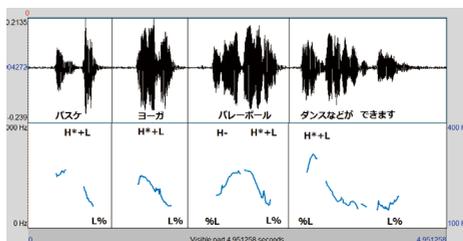


図 15：図 14 と同じ文を母語話者が発話した場合のイントネーション

なお、句頭のピッチの上昇が日本語と比べると遅れるのは、スウェーデン語（イエーテボリ地方）のピッチアクセントの影響であると思われる。図 16 に学習者 H による例を加えた。図中の赤い矢印は、ピッチの上昇が遅れている部分である。この学習者は日本に 1 年間の留学経験があり、イントネーション習得もかなり進んでいるが、このような母語からの「負の転移」もまだ残っている。



音源 14

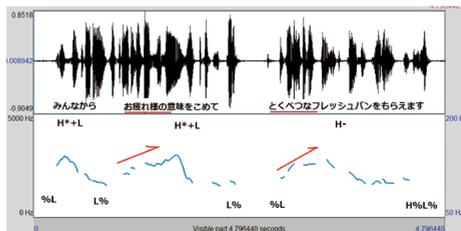


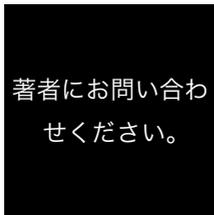
図 16：母語からの負の転移例：ピッチの上昇が遅れる（学習者 H）

#### 4.4 ダウンステップとイントネーション句

ダウンステップとはアクセント句のピッチピークが順次低められ、上位韻律単位であるイントネーション句にまとまる現象である。詳細は 2.2 の「統語構造とイントネーション」を参照されたい。ダウンステップは、日本語のみならず、スウェーデン語や英語でもみられる現象であることから、スウェーデン人学習者にとっても習得は困難でないかもしれないが、実際には、日本語のようなダウンステップが出現するのはやや上級になってからである。

日本語では連体修飾句や節はほとんどの場合、ダウンステップを用いて一つのイントネーション句にまとまるが、スウェーデン人学習者はこの点についてはどうであろう。日本留学経験のない学習者 C では「スウェーデン人の性格」「日本人の性格」のような「の」で繋がれる連体修飾句、「丁寧な表現」のような形容動詞による一語節などのすべてが、「へ」の字型のアクセント句の中に納まり、ダウンステップは出現していない（図 6 と 10 を参照）。またグループのなかでは最もイントネーション習得が進んでいる学習者 H と I でも「特別なフレッシュパン」（学習者 H・図 16）のような連体修飾句や、「みんなが知ってるシュールストローミングは」のような連体修飾節（学習者 I・図 17）がひとつの大きなアクセント句となっていてダウンステップは使われていない。東京方言母語話者の発話（図 18）では、「みんなが知ってる」「シュール」「ストローミング」という三つのアクセント句が認められ、それらがダウンステップでイントネーション

ン句にまとめられている。学習者 H の資料には、より複雑な構造をもつ連体修飾節の出現が多いが、ほとんどが上記と同じイントネーションにまとめられている。しかし中に図 19 にみるように、学習者の発話「クラブやパブで買うことができる年齢」という連体修飾節に少し、ダウンステップが観察される例も出現している。ひとつのイントネーション単位としてまとめていることから、連体修飾節という統語単位の認識があるとも解釈できる。このように、日本語ではダウンステップの典型的な例となる連体修飾句や節が、一つのアクセント句のなかにすっぽり入ってしまうのが、スウェーデン人学習者のイントネーションの特徴でもある。言い換えれば、学習者は連体修飾節などの統語単位を認識している半面、日本語のアクセント句に対する認識がないといえよう。



音源 15

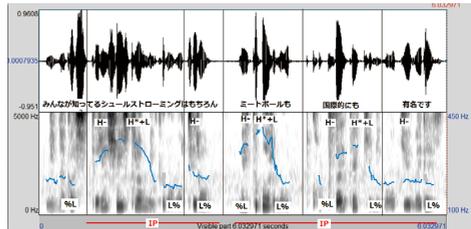


図 17：学習者音声におけるイントネーション句形成の例 (学習者 I)



音源 16

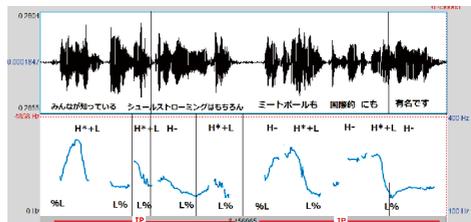


図 18：図 17 と同じ文を母語話者が発話した場合のイントネーション





音源 18

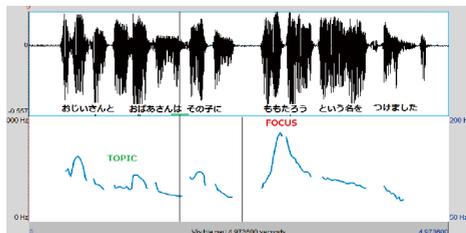


図 20：東京方言話者（男性アナウンサー）の発話に見られるトピックとフォーカスの提示例（『日本語音声<sup>2)</sup>』CDより）

図 21 と 22 でそれぞれ学習者と東京方言話者による「スウェーデンでフィーカは人気があるので、個人経営の喫茶店がたくさんあります」の発話のイントネーションを示した。「フィーカ」はもう何度か出てきた旧情報でありトピックである。反して、「人気がある」はコメントであり新情報である。発話のフォーカスは「人気がある」に置かれるべきである。東京方言母語話者の発話(図 22)では「フィーカは」のピッチが低く、続く「人気がある」で上昇する。反して、学習者の発話(図 21)では、反対に「フィーカは」のピッチが「人気がある」より高い。このように、トピックとフォーカスの関係を理解したイントネーションは今回の 9 人の話者には出現しておらず、日本語個別の難しいイントネーションであることが推測される。



音源 19

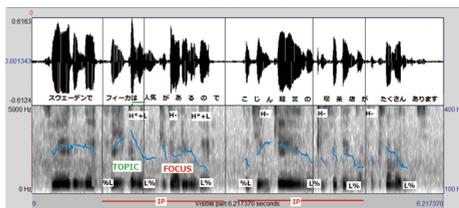


図 21：学習者によるトピックとフォーカスの提示例（学習者 D）



音源 20

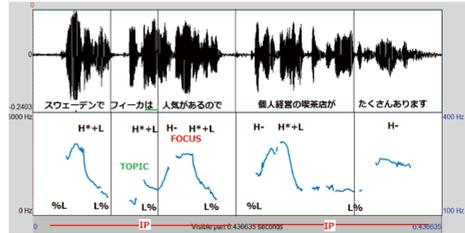


図 22：図 21 と同じ文を母語話者が発話した場合のトピックとフォーカスの提示例

## 5. おわりに

今回の調査では、中級の終わりから上級にかけてのスウェーデン人学習者 9 名による第二言語としての日本語のイントネーションの習得過程を分析した。今回の分析に基づき、以下の習得過程をイントネーション習得モデルの骨子として提案する。

- ・統語構造に基づく「へ」の字型の大きな韻律単位を構成する。この韻律単位をスウェーデン人学習者による中間言語としてのアクセント句と呼ぶ。これは東京方言母語話者のイントネーションではむしろイントネーション句に相当するかなり大きな単位である。
- ・アクセント句の冒頭に平板型のアクセントが出現する。
- ・やや遅れてアクセント句の冒頭に下降型のアクセントが出現する・下降型アクセントは下降のタイミングが遅れる。
- ・冒頭に 2 種類のピッチアクセントを区別し、後方は低いピッチで抑える「へ」の字型のアクセント句が定着する。
- ・「へ」の字型のアクセント句が、連体修飾句や節のようにやや小さな文法単位に対応するようになる。
- ・下降型アクセントのタイミングが改善する。
- ・アクセント句が母語話者のように、より小さな文法単位である「文節」

に対応するようになる。

- ・ダウンステップによりアクセント句をイントネーション句にまとめる。
- ・（文脈や情報構造を反映するトピック・フォーカスなどのイントネーションが出現する）。

スウェーデン人学習者にとって最もはっきりした母語からの「負の転移」は句頭のピッチの上昇が遅れること、およびピッチの下降のタイミングが遅れることである。学習者にとって、日本語の平板型、下降型という二種類のピッチアクセントの認識は比較的早い段階で現れるが、これはピッチ形状は違っても母語に二種類のピッチアクセントがある言語構造が「正の転移」となっているためかもしれない。日本語の場合、自立語にはすべて辞書的ピッチアクセントが付与され付属語とともに文節となる。そして、だいたいにおいて文節が下位韻律単位であるアクセント句に対応する。しかしスウェーデン人学習者にとってこの文節に対応するような単位の習得は非常に困難である事が明らかになった。スウェーデン人学習者はまず日本語のそれより遥かに大きな独自のアクセント句を構成し、それを下位韻律単位として中間言語文法を作り上げるところからはじめる。

東京方言のイントネーションモデルでは、モーラ、音節、韻律語、アクセント句、イントネーション句のように、下位から上位の韻律単位にまとめられているが、スウェーデン人学習者の日本語習得過程をみると、上位の韻律単位を習得してから下位の韻律単位に向かう。学習者はまず大きな統語構造をもとにその冒頭にピッチアクセントがひとつ出現する独自の「アクセント句」を作るが、これは東京方言話者ではイントネーション句や文という上位の単位に対応する。理由として、スウェーデン語は日本語と同じく二種類のピッチアクセントを区別するが、すべての語がピッチアクセントを有しているわけではない。スウェーデン語は基本的には英語など他のゲルマン系の言語のようにストレスを主体とする言語であり、ストレスのおかれる音節にのみピッチアクセントが現れる。また音節構造からアクセント1と2の区別が推測できるなど、日本語のピッチアクセントとの違いが原因になっている可能性がある。また文脈や情報構造から判断して発話するトピックやフォーカスイントネーションは今回の調査では出現

せず、アクセント句と並んでかなり難易度の高いイントネーションであると思われる。今回の分析で得られた習得モデルの骨組みに基づき、今後は初級、中級、上級とより体系的にスウェーデン語母語話者による日本語イントネーションの習得過程を調べてゆきたい。

## 注

- 1：『平成2年度・文部省科学研究費補助金重点領域研究・日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究・音声データベース「全国共通項目(1)」CD』研究代表者 杉藤美代子(1990)
- 2：『平成1年度・文部省科学研究費補助金重点領域研究・日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究・音声データベース「桃太郎・天気予報」CD』研究代表者 杉藤美代子(1989)

## 参考文献

- 郡史郎(1997)「日本語のイントネーション」『アクセント、イントネーション、リズムとポーズ』pp.169-202.三省堂
- 定延利之(2013)「日本語のアクセントとイントネーションの競合的關係」『日本語音声コミュニケーション1』pp.1-37.
- 杉藤美代子(2001)「文法と日本語のアクセントおよびイントネーション、—東京と大阪の場合」『文法と音声III』pp.197-210.くろしお出版
- 永野マドセン泰子(2009)「ダウンステップにみる高知方言のイントネーションの特徴」『高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要第3号』pp.83-92
- 永野マドセン泰子(2013)「南琉球・宮古伊良部島にみる無アクセント方言のイントネーション」『琉球の方言37』pp.25-44.法政大学出版
- 永野マドセン泰子・岡本グスタフソン有花・清水由紀子(印刷中)「スウェーデン語母語話者による日本語の習得—文法と音声にみる日本留学の効果—」『高知大学留生教育』
- 藤崎博也・須藤寛(1971)「日本語単語アクセントの基本周波数パターンと

その生成機構のモデル」『日本音響学会誌 34』 pp. 167-176

前川喜久雄 (1997) 「アクセントとイントネーション、—アクセントのない地域—」『諸方言のアクセントとイントネーション』 pp. 97-122. 三省堂

Beckman, M. & Pierrehumbert, J. (1986) Intonational structure in Japanese and English. *Phonology Yearbook* 3: 255-309.

Nagano-Madsen, Y. & Bruce, G. 1998. Comparing pitch accent features in Swedish and Japanese. *Nordic Prosody*, 215-224. Frankfurt am Main.: Peter Lang.

Venditti, Jennifer J. (2005) The J\_ToBi Model of Japanese Intonation. In Sun-Ah Jun ed. *Prosodic Typology: The Phonology of Intonation and Phrasing*: 32p. Oxford Scholarship Online.